

幼児の物との関わり・数量や文字との関わりについて

吉 田 裕 美 子*

Relations with infants relations with quantity and letters

Yumiko YOSHIDA*

Key words : 領域「環境」	Area environment
物との関わり	Relationship with things
数量との関わり	Relationship with quantity
文字との関わり	Relationship with characters
生活科	Life department

1. はじめに

幼児は、園生活の中で環境に主体的に関わり、自発的な活動である遊びを中心としている幼稚園・保育所・認定こども園等の保育施設での生活から、教科ごとの教科書を使用した一斉指導の学習を中心とする小学校での生活への移行に戸惑う姿がみられる。小学校生活に戸惑い、授業中に立ち歩いたり教室から出ていくなど、授業が成立しない「小1プロブレム」等の問題や、「学びの連続性」等の関心から、幼稚園・保育所・認定こども園と小学校の連携、いわゆる「保幼小の連携」の必要性がさかんに言われている。そのため、近年は就学前教育から小学校低学年までの接続期の教育という観点から、様々な取り組みが行われるようになってきた。

『幼稚園教育要領解説』では、「幼児は、発達や学びは連続しており、幼稚園から小学校への移行を円滑にする必要がある。しかし、それは、小学校教育の先取りをすることではなく、就学前までの幼児期にふさわしい教育を行うことが最も肝心なことである」¹⁾と明記されている。つまり、幼児は、幼稚園・保育園・認定こども園から小学校に移行していく中で、幼児教育と小学校教育との段差を乗り越え、滑らかな接続が必要であると考えられる。

小学校における「接続期の教育」の中核を担うのが生活科であり、生活科は、1989（平成元）年の小学校学習指導要領の改訂で、理科と社会を廃して新たに設けられた。しかし、理科と社会の合科学習ではなく、「小学校教育において低学年児童が主体的に取り組める学習活動の場を保証すること」²⁾と述べられていることから、幼児期の遊びを中心とした生活経験を踏まえた、体験的な学習を通して総合的な指導をすることが言われてきた。2008（平成20）年の『小学校学習指導要領解説 生活編』では、「例えば、4月の最初の単元では、学校を探検する生活科の学習活動の中核として、国語科、音楽科、図画工作科などの内容を合科的に扱い大きな単元を構成することが考えられる。こうした単元では、児童が自らの思いや願いの実現に向けた活動を、ゆっくりとした時間の中で進めていくことが可能となる。単元から徐々に各教科に分化していくスタートカリキュラムの編成なども効果的である。」と、入学始期の指導計画に関して「スタートカリキュラム」という用語が明記されるようになった。³⁾更に、2017（平成29）年の小学校学習指導要領の改訂では、2学年間を見通した指導計画を立てることが大切であり、スタートカリキュラムをはじめとする幼児期の教育との連携をあげている。

前述のとおり、入学当初から低学年の時期において生活科が中心的な役割を担いつつ、各教科と

* 東北女子大学

の合科的・関連的な指導の一層の充実を図ることが求められている⁴⁾とあるように、『幼稚園教育要領』に示された総則第2「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」にも、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」が記載されている。

無藤(2017)は、「この項目は、領域「環境」と、文字などは一部「言葉」の領域にも関連し、子どもが身近な環境での遊びや生活を通して、様々な数量や図形、標識や文字といった記号に気付き、それがどのようなものかを直感的に理解していくこと」⁵⁾と述べている。普段の生活の中で様々な記号に出会い、意味を知り、次第に自分たちなりに使うことができるようになることが、数量や図形、標識や文字等への興味や関心、感覚の始まりと考えられる。

また、「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」⁶⁾ことを目標とする生活科と、幼児教育において最も関係が深いのは、「周囲の様々な環境に好奇心をもって関わり、それらを生活の中に取り入れていこうとする力を養う。」⁷⁾ことを目指す領域「環境」である。本論では、幼稚園における領域「環境」の中から、小学校始期の学びにつながる物や数量・文字に関する保育者の環境構成の配置等について、保育室や園舎内の物や数量・文字に関わる保育者の環境構成への配慮等を具体的な事例を挙げて検討する。写真の記録は、2017(平成29)年6月～10月に朝の自由遊びの様子を撮影したものである。

2. 領域「環境」における物や数量・文字についての取扱い

幼児の物や数量・文字との関わりに関して、幼稚園教育要領の領域「環境」の「内容」と「内容の取扱い」に以下のように記されている。⁸⁾

内容

(8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに調べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。(9) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。(10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。

内容の取扱い

(1) 幼児が、遊びの中で周囲との環境と関わり、次第に周囲の世界に好奇心を抱き、その意味や操作の仕方に関心を持ち、物事も法則性に気付く、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること。また、他の幼児の考えなどに触れて新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わい、自分の考えをよりよいものにしようとする気持ちが育つようにすること。(5) 数量や文字などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切に、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること。

『幼稚園教育要領解説』には、物との関わりに関して、「幼児が心と体を働かせて物とじっくりと関わるような環境を構成し、対象となるその物に十分に関わるようなことができるようになることが大切である。」⁹⁾と明記されている。また、数量に関しては「知識だけを単に教えるのではなく、生活中で幼児が必要感を感じて教えたり、量を比べたり、様々な立体に触れたりするなど、多様な経験を積み重ねながら数量や図形などに関心をもつことが大切である。」¹⁰⁾と遊びなどの園生活の中で幼児が数量に興味をもつような環境の必要性を説かれている。文字に関しても「幼児にとって、自分が話している言葉がある特定の文字や標識に対応しているのを知ることは新鮮な驚きである。」「教師はまず幼児が標識や文字との新鮮な出会いを体験出来るよう環境を工夫する必要がある。」¹¹⁾と数量と同じように知識として教えるのではなく、園生活の中で幼児の発達に沿った文字や標識との出会いが工夫されるよう求められている。

以下、領域「環境」の物や数量、文字に関してどのような配慮がなされているか見ていく。

3. 物との関わり

写真1は、F幼稚園3歳児と4歳児の男児が砂場で遊んでいる様子である。スコップやシャベルなどの道具を使って夢中になって遊んでいる。写真2は、子どもたちが砂場の道具を取り出しやすいように、分かりやすく、片付けやすく道具ごとに分けられ、文字と図で示されている。



写真1 砂場での遊び



写真2 砂場の道具

写真3は、4歳児クラスでのままごと遊びである。キッチンの道具を使いご馳走を作ってお客さんにふるまっている場面である。写真4は、お店屋さんごっこの品物作りをしている場面である。おめん作りに必要な材料や道具を探し、主体的に活動している。写真5は、作ったおめんや作品を乾かす乾燥台に飾り、おめんやさんとして開店す

る場面である。どのように飾ったら見やすいのか、売れるのか、試行錯誤している場面がみられた。



写真3 ままごと遊び



写真4 製作



写真5 おめんやさん

4. 数量・文字との関わり

P園では、自然に関わる遊びを積極的に取り入れている。写真6は、外で年少組の子どもたちが色水遊びをしている場面である。アサガオの花びらや園庭にある草花をつぶしたり、みかんをすって色水を作っている。友達の作る様子や出来るまでの変化を見ていたり、友達の作り方を真似て挑戦する姿も見られた。自分の好きな色や思い思いに混ぜながら偶然にできる色を楽しんだり、色の量を考えながら友達とのやり取りが続いていた。

写真7は、子どもたちが道具を取り出しやすいように、道具ごとにケースや棚にも、何処に何をしまうのが文字や絵で示されている。

写真8はS幼稚園、年長児クラスの保育室内である。幼児は、登園後に日付の確認を行い、おた

より帳に書かれている数字を照らし合わせシールを貼り籠に入れる、という習慣が身についている。

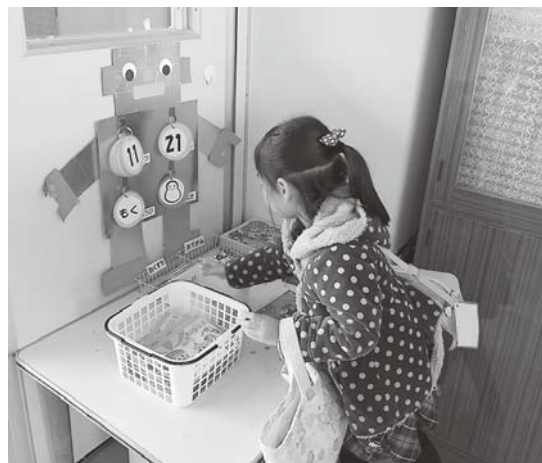


写真8 登園後の日付確認



写真6 色水遊び



写真9 空き箱製作の様子



写真7 道具の収納



写真10 空き箱製作の様子

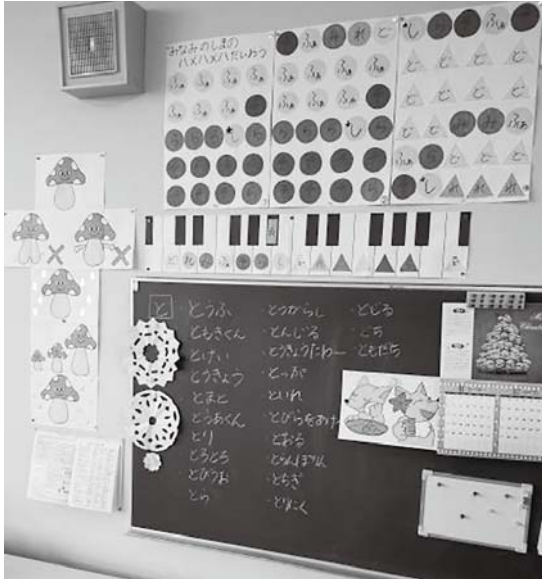


写真11 保育室内の掲示



写真12 保育室内の掲示

写真9、10は、年中クラスでのお菓子の空き箱などの廃材を使った製作活動である。それぞれが好きな素材を選び考え、遊びながらイメージをもち製作に取り組む様子がみられていた。いろいろな形の空き箱を組み合わせたり、積み上げたり、形や量などを考え工夫しながら製作している様子が見られた。

各保育室の掲示では、年齢ごとに図や絵ばかりではなく、幼児の発達段階に合わせて、子どもたちに無理のない量の文字情報を取り入れる配慮がなされている。

5. まとめ

幼児が主体的に活動するためには、環境がどのように構成されているかによって大きく左右される。幼児が興味や関心を持ち、思わず関わりたくなるような物や人、事柄があることで幼児が関わり、興味や関心が深まり意欲が引き出される。また、やってみたいと思えるように環境を工夫すると共に、試行錯誤を認め、時間をかけて取り組めるようにすることも重要である。主体的な活動を展開するためには、ありのままの自分を出せる保育者との信頼関係のもとで、安心感や安定感が基盤にあることが大切であると考えられる。また、素材や教具などは保育者がすべて用意するのではなく、幼児が自分で考えたり試したり工夫したりできるような環境を、幼児と共につくっていくことが重要であると思われる。

関らは、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」を育むには、遊びや生活の中で、繰り返し親しむ体験を重ねることが大切であるとしている。つまり、園内にはクラスや職員室、トイレなどの標識や表示、ロッカー玩具・道具の棚、当番表やマークや表示、それと共に文字が書かれている。その環境の中で幼児は、標識や絵、文字が何を示しているのかを理解したり、使う楽しさや便利さ、必要性を実感することになる。それがもっと知りたい、もっと使いたいという意欲につながったり、関心や感覚が育っていくと考えられる。¹²⁾

今回取り上げた子どもたちの活動場面では、いずれも保育者は子どもの様子を見守るのみで、子どもたちに任せていた。子どもたちの主体的な遊びを重視し、遊びや園の日常生活の中で物との関わり、数量・文字との関わりを深めている様子の一部がうかがわれた。

絵カードや四字熟語などのフラッシュカード、ワークブック、茶道や書道などを取り入れ集中力を養うなど、様々な方法で小学校低学年での学びを幼児教育に早く取り入れることで早期教育と捉える園も少なくない。物との関わりや数量・文字も知識として指導することで、子どもたちは興味

関心を持ち覚えていくであろうが、それは主体的な学びとは言い難い。園生活の中で様々な物との関わり、時間をかけて遊びこんでいく中で、子どもたちは多くの学びを得ていくことができ、生活科が求める「主体的な学習活動」に結びつくのは、子どもの主体的な活動を取り入れている保育のあり方なのではないだろうか。

幼保等から小学校へのスムーズな移行のための幼保小の連携は今後も更に進められることになるであろう。また、中核としての生活科の重要性も更に高まると思われる。

謝 辞

本研究にあたりご協力くださった弘前市 S 幼稚園、F 幼稚園、埼玉県上尾市 P 園様にお礼申し上げます。

〈引用・参考文献〉

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領』2018, p.84
- 2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 生活編』2017, p.82
- 3) 矢治夕起『幼稚園における物とのかかわり・数量や文字とのかかわり』淑徳大学短期大学部研究紀要第 56 号 (2017.2)
文部科学省『小学校学習指導要領 生活編』2008, p.45
- 4) 文部科学省『小学校学習指導要領』
- 5) 無藤 隆『平成 29 年告示 幼稚園教育要領 まるわかりガイド』チャイルド本社, 2017
文部科学省『小学校学習指導要領』
『幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領、保育所保育指針』チャイルド本社, 2014
- 6) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 2008, p.128
- 7) 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領、保育所保育指針』チャイルド本社, 2014, p.36
- 8) 同前, pp.37-38
- 9) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 2008, p.128
- 10) 同前, p.129
- 11) 同前, p.130